日本資本主義論の国際化視点

――『大正/大阪/スラム』への書評に答える――

玉 井 金 五

I

1986年に刊行した共同研究の成果である『大正/大阪/スラム――もうひとつの日本近代史――』(杉原薫・玉井金五編,新評論)に対しては、思いもかけず非常に多くの分野の方々からの書評・紹介等を得ることができた。本研究に参加した者として、これは勿論望外の喜びであった。これまで寄せられた批評に関しては、合評会(1986年9月)や私信等を利用して部分的にお答えした点もある。しかし、このさい本書構成上の主要な論点に係わる内容については、誌上で明確に検討しておくべきだと考え、編者一個人として思いきって以下に考察を加えることにした。

まず、寄せられた書評・紹介等のうち、いくつかのものを発表順に掲げておくと以下の とおりである。

- 1. 布野修司『朝日ジャーナル』 (1986年 7月25日号)
- 2. 江口英一『週刊読書人』(同年9月15日号)
- 3. 牧野厚史『ひょうご部落解放』(同年9月号)
- 4. 竹村民郎『週刊エコノミスト』(同年 11月18日号)
- 5. 大串夏身『クリティーク』(1987年 1 月号)
- 6. 川合隆男『日本労働協会雑誌』(同年 1月号)
- 7. 木下順『経済学雑誌』(大阪市大,87

巻5・6号, 同年3月)

- 8. 真実一美『経済学会雜誌』(岡山大, 18巻4号, 同年3月)
- 9. 中川清『社会経済史学』(53巻1号, 同年4月)

いずれの方々からも,実に貴重なコメント を与えられたことに、まず深甚なる謝意を表 わしておきたい。とくに, 布野修司氏の書評 は、本書が刊行されてからわずか1カ月後に 発表という異例の早さであり、それが参加者 一同にとって大きな励み,刺激になったこと はいうまでもない。布野氏のをはじめとして, 以後続々と寄せられた書評・紹介は、実にさ まざまな研究分野に属する人たちからであり, その意味では, たんなるスラム研究ではない とする参加者の秘かな狙いがズバリ当ったわ けである。それだからこそ、本来それぞれの 方々にお答えすべきではあるが, 残念ながら 与えられた紙幅でこれを果すことは到底無理 である。したがって,以下では本書の全体構 成について比較的長文の書評を寄せて下さっ た方々のものに限定し、出来る限りのことを 論じ尽したいと考えている。1

II

まず第一に採り上げるのは、大串夏身氏から寄せられた書評である。大串氏のものは本書を丹念に検討され、研究史に占める位置、 全体の構成の問題、方法論の問題というよう に三項目に分類のうえ,本書に対して真正面 から迫力ある批評を加えられている。

研究史に占める位置については、次の三点を指摘される。第一は、スラム研究の新領域を開いたということで、「特に、労働力市場の問題として扱ったのは初めてではないだろうか」と評価された。そして第二には、労働力市場で「スラム労働力市場」を新しく提起したことを採り上げ、第三には、本書のスラム分析は「第三世界を視野に入れ」る形で行なわれていると、好意的に位置づけられている。これらの指摘はすべて、本書を極めて的確に把握しているといえるだろう。

全体の構成に関してみると, 大串氏は「日 本の都市スラム史上における大阪の, 十分な 位置づけを欠いている」点を批判された。と くに、内務省地方局『細民調査統計表摘要』 (大正3年)と内務省社会局『細民集団地区 調査』(大正12年)を使用して、大阪の特徴 を析出すべきだと主張されている。たしかに, この点は本書で不十分な箇所のひとつとして 指摘されてもやむを得ないかもしれない。た だし、本書をみればわかるように、スラムと いっても, むしろ内務省レベルの調査が深く 立ち入っていなかった地域を分析対象にして いる。とくに, 西浜地区や東成集住地区はそ の代表例である。その意味では,大串氏の批 判にもかかわらず本書が大阪スラムの最大の 特徴点を描き出そうとしていた意図を、少し でも理解していただきたいと思う。それはま た, 東京を含めた当時の大都市スラムとの比 較史的研究をも展望しているのである。

最後に、方法論の問題。とくに、大串氏は「スラム労働力市場」の概念規定の仕方について疑問を提起されている。氏は、「従来、労働力市場とは、賃労働と資本のレベルから論理を展開させ概念規定をするのが一般的方法であった。ところが、ここではスラム生活圏を設定し、そこから労働力市場を捉え返すという方法がとられている」と述べ、「これ

は、いわば理論より歴史的現実から出発する 方法である。本書の中で最も議論を呼ぶとこ ろであろう。発想の斬新さはよしとしても, その方法、概念規定については、さしあたっ ての問題提起の域を出ていない」という。大 串氏の指摘は一面で的を射ているが、本書で いう「スラム労働力市場」は、資本・賃労働 関係に規制される労働力市場という経済的規 定では処理できないものを含んでいる。日雇 いなどの雇用労働と零細自営業を営むことの 間には, スラム居住者からみるとさしたる差 異はないと考えられたし, 両者間の転職はし ばしばあった。かかる傾向は、スラムそれ自 体とそれを取巻く都市社会の社会的文化的要 素を多分に含んでいるものである。したがっ て、むしろ"生活過程"を前面に押し出す形 であえて概念規定するのが、「スラム労働力 市場」をヨリ鮮明にすることができるのでは ないかと考えたわけである。

この点に関して、次にみる木下順氏が、氏の書評で以下のような指摘をしているのに注目しておきたい。木下氏は、本書のなかの一般労働力市場とスラム労働力市場の区分にふれ、「……この二分法は、なるほど現在の日本の労働市場研究では人気を博さないかもしれないが、『インフォーマル・セクター』を抱える第三世界は勿論のこと、アメリカ合衆国やヨーロッパの労働市場を分析する際にも効力を発揮するであろう」と21。

¹⁾ 以下で論及する書評については、すべて引用ページ数を省略する。

²⁾ 上述した布野氏は、現在のインフォーマル・セクターをみるうえで、本書が大きな意味を有すると指摘された。一般労働力市場とスラム労働力市場の区分にふれ、布野氏は「こうした二重構造論的視角は第三世界におけるインフォーマル・セクターの経済的役割への関心と明らかに通底する」と述べている。また、真実一美氏も、「評者は本書を読みながら、今日の開発途上国のインフォーマル・セクターや先進国の移民労働者の問題と多くの現象が重なっているように思われてならなかった」と感想を述べられている。

いずれにせよ、大串氏が指摘された各論点 はまださらなる検討が重ねられるべきテーマ ではあるが、氏がいうように、「これを契機 に今後さらにスラムについての検討が深めら れるよう」にしていくべきであろう。

122

III

第二に採り上げるのは、上述した木下順氏の書評である。本書に寄せられた書評等のなかで、同編者らの前著『世界資本主義と非白人労働』(大阪市大経済学会、1983年)と本書との本格的な比較検討からいくつかの重要な論点を導き出されたのは、木下氏だけであった。³¹ もっとも、ここで前書の紹介は割愛しなければならぬが、木下氏が前著との関連で問題を出されていることを前提に、以下議論を進めよう。

まず、木下氏は本書の構成にふれ、次のよ うにいう。「前者(第2~5章)が先の一文 における『スラム生活圏の地平』を明らかに したものとすれば、後者(第1章・第6章) はとくに『日本の近代化過程』に関わるもの と理解できる」,「しかしながら,読み返す たびに、私には両者が異質のものに思えてな らなかった。第1章・第6章は本書の内容に, 『スラム生活圏の地平』とは明らかに異質で あるのみならず対立しさえもする視角を持ち 込むことになったとの印象を禁じえなかっ た」。氏のいわんとするところはこうである う。2~5章は、スラム生活圏を明らかにし たのに対して、1・6章は経営と行政の地平 を考察したものである。もしそうであれば、 なぜ経営や行政の地平へスラム生活圏の労働 者=住民が引き入れられなければならないの か。否むしろ, スラム生活圏における労働者 =住民側の主体に注目すべきである。主体側 の思想と行動があってはじめて,経営・行政 側が何らかの形で対応し、そこからはじめて 両者間に真の対抗関係が形成されるのではな いか。その点が十分説かれていないというの

である。

かくして、木下氏は次のようにいう。「問 題は、したがって、〈経営者および(ない し)行政の地平>を、『スラム生活圏の地平』 を離脱した者が到達する「『上昇』目標」と してではなく、『スラム生活圏の地平』に 対抗するものとして措定することではない かし。 たしかに, 氏が述べるように, スラム 生活圏の労働者=住民の主体性に関して本書 が明晰な叙述を展開しきれていない面がある かもしれない。しかし,経営や行政側の地平 がたとえ「『上昇』目標」として設定された としても、本書で描いた三地区においてはそ れぞれの社会構造の独自性から, 先の地平に 対してそう簡単に入り込めない制約が多分に みられることはいうまでもないだろう。その 意味で,経営と行政の地平は「『上昇』目標」 とともに, スラム生活圏の地平に「対抗」す る面も自ずから有するのである。

ただし、木下氏が述べるように、スラム生活圏における「労働者=住民の主体性をどのような理論的枠組によって把握するか――これが本書のみならずわれわれも含めた研究者の課題である」という点は、十分銘記されねばならない。

では、木下氏がかかる主体性についてこれ ほどこだわり続ける理由は何なのか。それは おそらく、本書のキイ概念として用いた「労 働=生活過程」への着目にあるといえるだろ う。木下氏は本書の課題を整理して、(1)労 働力需要とスラム生活圏との結び付き、(2)労 働者は「いかなる労働=生活過程の中に組み 込まれ」、「どのような形態の貧困や差別を経 験したのか」、(3)「一般労働力市場」と「ス ラム労働力市場」との二重構造の大正期日本 資本主義における意義、(4)識者・行政当局の 対応、の4点を指摘された。そのさい氏は、 「本書はスラムを分析するのに独自の立場を とっている。従来は貧困や犯罪の温床と考え られがちであったスラムに、独自の文化の母 胎を見ているのである」と述べ、とくに上述 の(2)と(3)の重要性を感知されている。

だが、木下氏によれば、1983年の前著で頻繁に用いられた「労働関係」が本書で後退し、新たに「労働=生活過程」が登場している点に十分な説明がない。そして、それが主体性問題の欠如になった原因なのではないか、というのである。いいかえれば、前著では「能動の相にある労働者が問題」になっているのに、本書はそのようになっていないという。しかし、氏によれば本書でも「能動の相」をスラム生活圏から析出すべきだという批判である。「労働=生活過程」においても、主体性論は欠かせないというのである。

勿論、本書の2~5章では一部そうしたテーマが論じられているが、木下氏には必ずしも十分な展開とはみえないのだろう。氏がこれほど執拗にこの課題を検討されようとしたのは、次の表現に見出すことができる。「……『労働=生活過程』にまで降り立った地点から『労働関係』を見透す枠組は、未だ既存の理論には求めることができないと考えるからである。本書が提示した『労働=生活過程』の諸相は、その意味で、最も先端的な業績といえるのである」。 みられるように、それは現在アメリカの労資関係史研究に従事する木下氏自身に対しても突きつけられる課題なのである。

IV

最後に、中川清氏から寄せられた書評を採 り上げておきたい。中川氏は、すでに刊行さ れた力作『日本の都市下層』(1985年)によ って戦前の東京市の分析を果されているので、 氏自身の研究成果を踏まえながらの批評になっている⁵。

中川氏は、まず「本書は、その分析視角と 実証性において、『スラム』の労働と生活に 関する研究に新たな一歩を印すとともに、近 代の労働史、生活史および都市史に対しても 一つの刺激を与えるものといえよう」と述 べ、本書に対して好意的な評価を下しながら も、各章にわたって問題点の綿密な検討を加 えられた。とくに、三つの「スラム生活圏」 の分析のなかで「生活過程」の叙述に関して は、「世帯」レベルの掘下げが十分でないと の指摘をしている。

たとえば、本書の2・3章について中川氏はそれぞれ次のようにいう。「例えば、マッチ工業の中核的担い手の児童から妻への変化、さらには妻の有業率そのものの低下(脚注の資料等から導ける)が、『生活過程』に即して分析されていなかったのは残念である」、「なぜ『一戸』の規模が考察されなかったのだろうか。『限界がない』人口流入の原因が形成された『共同体』の『生活過程の構造の中に』求められるとすれば、世帯の性格の検討は基本的な要件であったように思われる」。氏によれば、収入・家計を中心とした消費生活権造を軸に上述した箇所の説明づけができ

³⁾ 牧野厚史も、本書は方法論的に前著を継承するものだと指摘され、「あくまでその対象を大阪の『スラム』における労働=生活過程に限定しつつも、それが、世界資本主義とのかかわりで日本資本主義下の労働関係を再構成してゆくという大きなテーマの一環として位置づけられている」と本書を正しく理解された。

⁴⁾ 木下氏はここ数年,上述した新たな枠組を模索する作業として,「アメリカ合衆国労資関係一史研究の諸潮流」という一連の論稿を下記の雑誌に発表しつづけているので,参照されたい。 『国学院経済学』33巻4号,34巻1号,34巻3・4号,35巻3・4号,1985-87年。

⁵⁾かつて筆者は、中川氏の著書を採り上げ、いくつかの問題点を指摘した。併せて参考にされたい。これについては、『社会経済史学』52巻5号、1987年1月、所収の書評をみよ。

⁶⁾ 斎藤修氏も、私信のなかでではあるが、世帯形成や世帯構造あるいは人口構成等の分析が不十分だと述べている。氏は、自らの問題意識に立脚されて、最近『商家の世界・裏店の世界――江戸と大阪の比較都市史』(リブロポート、1987年)を刊行された。

るし、また当然そうすべきではないかという ことであろう。たしかに、「世帯」レベルの 分析がやや不十分であることは認めざるを得 ない。この点に関しては、さらなる事例研究 で補うしかないだろう。

ただし、中川氏のいう「生活過程」とは各 世帯を基礎単位に出発する考えのように思わ れ、いわば各世帯ごとの集計として「生活過 程士が強くイメージされているかのごとく理 解できる。しかしながら、本書でいう「生活 過程 | とは、各世帯の集計というより、むし ろひとつの地区単位でみる「生活過程」の描 写に力点が置かれ、共同性を維持する日常生 活のなかからの特徴点をできる限り抽出しよ うと努めている。なぜなら、本書の対象とな った三地区が、「世帯」を超えてつながりを 有しようとする独自性を, それぞれ十二分に 持っていたからであった。したがって, 「生 活過程 | だけを切り離して論じるよりは、む しろ木下氏が注目したように、「労働=生活 過程」としてトータルに把握するのが、本書 の意図にヨリ近づくと考えるべきであろう。 この点に関する見解の相異が、本書の4~6 章に対するコメントとして出ているのではな

いだろうか。

他方,中川氏は1章の批評において,「宇 野の議論が主に第一次大戦前の寄宿女工を対 象として組み立てられていたために, 労働と 生活とを余りにも一体的に捉えていたのでは ないかという疑問が残る」と論じている。勿 論,対象が中川氏のいうような限定をもつに せよ、宇野のそうした議論の組み立ては、彼 にとって当時の日本の農村と都市の双方を知 ることの重要性があったからに他ならない。 宇野の考えでは、もどもと都会育ちの労働者 よりも、農村から都市へ流入した人々に対し て一種の"労働=生活規律"を植けつけてい くことこそが, 社会的にかなり大きな意味を 持っていたのではないのだろうか。勿論、そ うだからといって前者のケースを無視してよ いというのでは毛頭ない。だが、本書で分析 した三地区は序章でモデル化(表一1を参照) しているように、労働力の給源が主として農 村であった。その意味では、農村の労働=生 活規範を無視した労働=生活過程像は本来の 意義を失なってしまうことになるのである。 字野は, 字野なりに当時の社会状況の問題性 を見事に知悉していたのではないだろうか。

表―1 スラム三地区の労働=生活過程モデ	E活過程モデル
----------------------	---------

			日本橋方面, 釜ヶ崎地区	西浜地区	東成密住地区
主た	る給	源	近郊農村	農村部落	朝鮮済州島 朝鮮半島
他の給源	原との接	触	部落住民, 朝鮮人の 流入あり	朝鮮人の流入あり	
職種傾向	土方,力	役	0		0
	零細工場單	敞工	Δ	0	0
喊俚识问	下 駄	職	Δ	0	
	屑 拾	い	0	Δ	\triangle
住	居 形	態	木賃宿,長屋	長 屋	朝鮮人下宿
基本	的差别形	態	職業・居住地域差別	血縁・出身地別差別 職業・居住地域差別	血縁・出身地別差別

⁽注) 本文参照。○は代表的職種,△は比較的よくみられた職種を示す。

ともあれ、上述したように中川氏が個々の 論点に立ち入って批評を加えられたうえで、 最後に以下のように結ばれたことは参加者に 対するこの上ない賛辞である。「この作業が 『スラム』研究を狭い枠組から解き放った意 義は計り知れないほど大きい。そればかりで はない。『スラム生活圏』の諸相を描き出す 濃密な実証性においても、本書は高く評価さ れねばならない。本書がこの分野の研究への 囚われない出発点となることを願うばかりで ある」。

V

これまで、三つの書評をもとに本書に対する批評とそれらに対するリプライを展開してきた。論点は多岐にわたっているから十分論じ尽せたとはいえないが、できる限り書評の意図を汲み取ってお答えしたつもりである。誤解があれば御寛恕願いたい。

ただ、本書に係わる全般的なことで、いく つかふれておくべきことがあるように思う。 たとえば, 本書のなかで, スラム労働者から 近代的工場労働者へのテイク・オフの問題に 関しては、1章での近代的労働=生活過程像 の提示と、6章でのそうしたテイク・オフを 側面から援助する行政側の政策分析という二 つの箇所が、強く関連性を有している。それ に対して、2~4章はまさに「スラム生活 圏」そのものを扱っている。しかも、これら においてはそこから容易に脱出できぬ内的構 造を「差別」の問題と関連させて構成してい る。この点に関しては、大阪でほぼ妥当した 事実であり、それゆえ、序章で「一般労働力 市場」と「スラム労働力市場」の二つに概念 化した操作は,大阪モデルとして極めて有効 なものであるといえよう。したがって、日本 の労使関係史においては,第一次大戦後の重 工業の労使関係形成に着目され、あたかも近 代的工場労働者が次第に有力な地位を占めて いく形で位置づけられていくが、そのプロセ

スを大阪に直接適用することは到底できない というべきであるⁿ。

第二に,本書が分析した大正期は,いわゆ る「日本資本主義論争」が華々しく展開され る前夜という重要な時期であった点に言及し ておこう8)。 論争では、係争点が主に「農業 問題」に収斂していくが、1920年代に入って からの都市問題激化,民族問題 台頭等は, 本書でみたように社会的に非常に重要な意味 を有した。だが、論争が生起すると、主眼は 都市よりもむしろ農村であり、 論争下におけ る社会問題は, やや一方に比重を移して把握 されていったように思われる。だが、それだ からこそ当時の都市・民族問題等を含める形 で1920年代後半の社会認識を再構成しなけれ ば、日本資本主義の位相を十全に体系化する ことは不可能だろう。本書はその意味で, 日 本社会の大転換期である第一次大戦期から19 20年代前半という時期の社会経済的深層を, 一定の視角から掘り下げてみようとしたこと である。本書のいくつかの箇所で,都市と農 村の関連性を絶えず意識しているのはそのた

第三に、本書は日本における近世から近代へという移行過程において、いいかえれば19世紀から20世紀へと推移していく大きな社会体制の転換期において、生じた社会的価値観の旋回ということを近代的「差別」の生誕に焦点をあてて解明しようともしたものである。つまり、それまでの伝統的「差別」が一体いつ、いかなる形で近代的「差別」に変転を遂

めである。

⁽出所) 『大正/大阪/スラム』, 22ページ。

⁷⁾ 私信において、野村正實氏は日本の労働者の「下層社会」からの離脱に論及され、従来の通説と本書での分析視角の関連性を問われた。この点の詳細に関しては、参加者の一人である福原宏幸氏の次の論稿を参照されたい。福原宏幸「近代日本スラムの労働=生活過程――大阪での軌跡――」(社会政策学会編『社会政策学会年報第32集』、御茶の水書房、近刊)。

⁸⁾ 杉原薫氏は、近刊の Journal of Peasant Studies に "The Japanese Capitalism Debate, 1927–1937" を発表する予定である。

げていったのかを、大正期大阪という一特定期に検出を試みた。なぜなら、本書で詳述したように、東アジア的スケールで労働力の移動が生じたということが、わが国における近代的「差別」の生成、定着を大阪において決定的にしたといえるからであった。おそらく、日本の近代史上、これほどの社会文化的摩擦が生じたのは大阪をおいて他にないのではないだろうか。20世紀における新しい近代秩序の形成というのは、「差別」の問題を抜きにしては決して語れないのである。

M

本稿を閉じるにあたって、ひとつだけ明示 しておきたいことがある。それは、副題に「 もうひとつの日本近代史」と付したように、 もら一度日本の資本主義発展史を新たな視角 から再考しようとする意図をもっていたこと である。その場合, 共同研究の参加者全員が, これまで主に外国研究に携わってきていたと いうのがひとつの強みであった。イギリス、 フランス, ドイツ, 中国, インド等というよ うに、各参加者のフィールドは異なるにせよ, 純粋の日本研究者は一人もいなかった。その ことは、さまざまな角度から日本近代史の見 直しを求める声となっていった。日本の資本 主義化はアジアレベルの国際展開としてもう 一度検討しなければならない, 日本の労働関 係形成は,対欧米基準で測りきれるものでは ない, 日本の近代化は, 「差別」の再編を抜 きにしては考えられない等々。

その意味で、対欧米のみではない国際的視野で日本の資本主義化を再構築しようとする場合、研究成果それ自体がそれに十分耐えられるだけの強靱な性格を有することが必要だろう。とくに、本書のような「労働=生活過程」に係わる課題を扱うとなれば、どこに日本的な近代性と伝統性が見出されるのか、そしてそれはどの程度アジア的なものなのか否か。本書では、20世紀資本主義の形成史上に

おける日本的社会秩序の確立過程の一断面が、いいかえれば「労働=生活過程」の日本的特質が、大正期の大阪においてまさに見事に析出できることを訴えようとしたつもりである。それは、「日本資本主義論の国際化」ということを十分に意識した視点に基礎づけられたものなのである10。

⁹⁾ 江口英一氏は、上述した書評のなかで本書ににおける社会史的方法に注目され、「日本における労働史、そして社会史として、一つの本格的なものが提供された」と述べられている。労働史=社会史的接近は、今後さらに進展すべきであろう。

¹⁰⁾ 竹村民郎氏は、前述した書評のなかで本書の 性格にふれ、「筆者たちが学界の『常識』で 『近代化』を斬るのではなく、自分たち自身で 考えようとしている」と主張されている。これ は、まさに本書の基本視点を衝いているといえ よう。また、川合隆男氏も、「もうひとつの日 本近代社会調査史、社会科学史、日本近代史の 可能性を切り拓くもの」と指摘して下さった。